

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：32626

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284116

研究課題名(和文) 書記伝統における標準規範の歴史的東西比較研究

研究課題名(英文) Standard Norms in Written Languages: Historical and Comparative Studies between East and West

研究代表者

原 聖 (HARA, Kiyoshi)

女子美術大学・芸術学部・教授

研究者番号：20180995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：本科研の重要な成果は、(1)書き言葉生成時にある程度の標準化が行われている、(2)欧州の初期標準規範においては、文字化と詩歌など韻律規則を伴う書記規範の生成の2段階を経る、(3)ラテン語文化圏でも漢字文化圏でも、権威をもつ文字をそのまま採用する場合と、その変種的な創作を行う場合がある、(4)欧州における新文字の生成は紀元前1千年紀から紀元後1千年紀であり、(5)漢字文化圏における漢字に類する新文字の生成は、やや遅れ、紀元後5世紀以降、表音文字の中東からの流入以降、中央集権の力が比較的弱まる宋王朝(10-12世紀)にかけてである。

研究成果の概要(英文)：The most important achievements of this study are (1) written language is standardized to some degree at the time of acquisition, (2) in the early standard norms of European languages, written language norms are acquired by two-steps: acquisition of written language, production of written language norms with prosody rules, such as in poetry, (3) in the East Asian cultural area as well as in Latin cultural area, there are cases, on the one hand, to adopt an authoritative scripture, and on the other hand to create written language reflective this authority, (4) new production of written language in Europe began in the first millennium BC, and continued in the first millennium AD, (5) a generation of new written languages similar to Chinese characters in the East Asian cultural area is slightly delayed, after the inflow of the phonogram from the Middle East in the 5th century AD to the Song dynasty (10-12 centuries), when the central political power was weakened to some extent.

研究分野：言語社会史

キーワード：伝統的書記言語 言語規範 標準語 文字転写 韻律書記化 ラテン語文化圏 漢字文化圏 東西比較

1. 研究開始当初の背景

言語学理論のなかで、標準語化論に貢献したのは、プラハ学派であり、とりわけ標準語の「柔軟な安定性」を主張したマテジウスの先駆性には注目すべきだが、その後、ハウゲンなどの社会言語学派、とりわけその「言語計画論」にその成果が受け継がれ、さらに英国の社会言語学者ミルロイの「標準化イデオロギー論」によって精緻化された。言語学においては、「言語涵養論」を提唱したヤーコブソンや「言語改革」に関して世界の主要言語についての概説を編集したアジェージュらの研究が重要である。言語規範に関する包括的研究としては、トーマスの「言語純化主義」研究(1991年)があげられる。2000年代に入ってから言語社会史研究も言語規範の歴史的研究として本研究の基盤をなすのであり、パーク『近世ヨーロッパの言語と社会』(本研究代表者による邦訳2009年)、バジジョーニ『ヨーロッパの言語と国民』(邦訳2006年)、大黒俊二(本研究の研究分担者)『声と文字』(2010年)などがあげられる。東アジアに関しては、本研究の連携研究者、岩月純一の加わる『訓読論』(2008年、続編2010年)、金文京『漢文と東アジア』(2010年)、また南アジアに関しては、本研究の研究分担者、藤井毅が主導する「南アジア書字コーパス」のプロジェクトがある。

2. 研究の目的

これまでの書記伝統の標準規範に関する研究は大半が個別言語ないしその周辺地域に限られ、本格的な比較研究、とりわけ一つの文化圏を超える比較研究はなく、本研究はそれを試みることになった。

その目的は、これまでラテン語文化圏は表音文字であり、歴史的に考えて標準化が困難であったと考えられ、その一方で漢字文化圏は表意文字であり、規範化に関しては文字の一律化に限定されることが多く、標準化自体

への関心も近代以降に限定される傾向にあった。本研究では、対象を書記伝統の長い地域すなわち欧州とアジア(とりわけ東アジア)に限定し、文化圏どおしの総合的比較を行うことであった。

そのためにはとりあえず a)ラテン語文化圏と b)漢字文化圏のその書記言語規範の特徴を把握することが必要であった。

a)については、研究代表者の専門であるケルト諸語、西欧諸国語を事例に、その書記言語規範の生成と近代における特徴を把握した。

b)については、表意文字が主流である書記言語規範に関して特徴といえるものがあるかどうかを検証した。

3. 研究の方法

欧州(原聖が統括)、東アジア(初年度はパトリック・ハインリヒが、2-3年目は包聯群が統括)、南アジア(藤井毅が統括)の3班にわけ、それぞれ古代、中世、近現代に分割して研究を進め、2年目以降、比較研究にすすみ、3年目に比較研究を総合化した。さらに1年目に標準化理論の専門家(ディック・スマックマン)をオランダから、さらにモンゴル、中国から中国周辺の標準語化の歴史の専門家(ブルブジャブ、バヤルメンド、黄行)を招聘しシンポジウムを行った。2年目には、東西文字文化の接点ともいえるモンゴル(内モンゴル)において、内モンゴル大学の協力をえて、東西比較を見すえたシンポジウムを開催し、欧州から中東欧諸言語の専門家(トマシュ・カムセラ)、社会言語学一般の大御所(田中克彦、フロリアン・クルマス)などを招聘して討論を行った。さらに東京では、ラテン語・ギリシャ語の専門家(ニコラス・オストラー)と欧州の代表的少数言語であるフリジア語の専門家(チアド・デフラーフ)を招聘して研究集会を開催した。3年目には、総合的シンポジウムを開催し、これまであまり話題にしていなかった中東

の伝統的書記言語、アラビア語の歴史の専門家（中江加津彦）、また契丹語の専門家（ダールハン）を招聘し、補完的な議論を組み込みつつ、最終的な成果のまとめにつなげた。

4. 研究成果

まず、ワグナーほか3氏による編著（Wagner et al. eds., *Scribes as agents of languages change*, Walter de Gruyter, 2013: 5-7）により、文字獲得の書記段階ですでにある程度の規範化が行われていたことを確認しておきたい。古代においては、文字の使用はごく少数の専門的集団に限られ、専門家集団による規範化は不可避だと考えられるからである。なおかつ、その規範化には2段階あり、最初が文字の獲得 *Verschriftung*（文字化、ここでは「文字転写」と呼ぶ）であり、第2段階が詩歌の規則などを伴う「韻律書記化」*Verschriftlichung* である。本研究でも研究代表者はこの用語を使用した。

1 古代： については、ギリシャ語ラテン語を中心とした欧州古典古代を相対化することが可能である。すなわち、欧州古代文字史で重要だったのは、地中海を紀元前12世紀あたりから制覇していたフェニキア（ポエニ）人のフェニキア語であり、ギリシャ語はこれから前9世紀頃、文字を導入し、ギリシャ文字を形成した。前5世紀には、ホメロスなどの詩歌の規範的書記化、すなわち「韻律書記化」が起こる。

一方、西方ギリシャ文字を借用したのがエトルリア文字であり、ラテン文字であった。前700年頃であり、前3世紀からラテン語の「韻律書記化」が始まる。ラテン語が権威を持つのは前1世紀以降の古典ラテン語期であり、しかもイタリア以西に限られる。イタリア以东では、ギリシャ語の権威が維持され、ローマにおけるキリスト教典礼のラテン語化も3世紀半ば以降である。4世紀始めにローマ帝国でキリスト教が国教化し、そこでキリスト教とラテン語が結びつき、ラテン語

文化圏という大きな権威をもつ領域を形成する。

興味深いのはこの時期になって、ルーン文字（2世紀半ばの文字化、9世紀頃「韻律書記化」）、オガム文字（3世紀末に文字化、8世紀には廃れ、韻律書記化は行われない）、ゴート文字（4世紀に文字化、韻律書記化）といったラテン文字に対抗的な文字が誕生することである。ラテン語文化圏への対抗意識がそこにある。

については、いわゆる甲骨文字の時代（前14-12世紀）は書体が統一的とはいえず、規範化の希薄な「転写文字」だが、前11-前8世紀の西周の時代になって、韻律書記化が始まる。前3世紀の秦の時代には小篆書体の登場により、さらに強力な規範化が進められる。漢字文化圏は、この表意文字により、文字的統一が継続されたが、5世紀以降のソグド文字という表音文字が流入して、事情が複雑になる。

ソグド文字は、前1千年紀中東の国際語であるアラム文字をもとにしており、アラム文字は、欧州アルファベットの原型となったフェニキア文字と密接な関係にあったので、ここで東西の文字史が交錯するのである。ソグド文字はウイグル文字、モンゴル文字の原型であり、貿易商人としてのソグド人の活躍時期は5-7世紀である。欧州におけるラテン語周辺の新文字の生成時期とほぼ重なり、興味深い。さらに6世紀から10世紀にかけて、中央アジアからユーラシア、南ヨーロッパ（バルカン半島）にかけて突厥文字とその変種が出現し、やや遅れて、契丹文字（10-12世紀、モンゴル系遼王朝）、西夏文字（11-13世紀、チベット・ビルマ語系西夏王朝）、女真文字（12-13世紀、後の満州語系金王朝）が創出される。契丹文字では漢字の部首を似せつつ、表意文字と表音文字の両系統があり、これもソグド文字以降の東アジアへの表音文字の侵入の影響と考えられ、興

味深い。

なぜこの時期に「擬似漢字」的文字が集中的に出現したかについては、この時代の中国の統一的王朝である宋王朝（10-13世紀）の権力が相対的に弱かったことが原因として考えられる。

については、サンスクリット語という、紀元前5世紀（から前4世紀にかけて）にすでに規範化されていたプレスティージュの高い書記言語が存在する。グプタ朝（3-6世紀）に古典文学が整備され、絶対的な権威を誇ったが、13世紀以降のイスラム王朝、18世紀以降の英国支配などにより、その権威が低下した。こうした権威低下の長期的状況により、多くの文字が誕生することになったと考えられる。

中東では、7世紀、アラビア語がイスラム教聖典「クルアーン」(コーラン)の言語になり、翻訳を許さない絶対的文化力により、イスラム圏で唯一の書記言語となっていく。これは他の地域では見られない現象である。

2 中世・近世： 印刷本の出現は文字の規範化に大いに貢献した。中国では、すでに9世紀に木版印刷が開始され、11世紀には膠泥活字による活字印刷もはじまる。この時期に生成された西夏文字、契丹文字、女真文字といった「擬似漢字」でも活版印刷が確認されている。表音文字であるチベット文字やウイグル文字でも12-13世紀に印刷が行われた。

欧州での印刷本の出現は、15-16世紀であり、まさに「俗語」Vernacular languageと呼ばれたフランス語、イタリア語、ドイツ語などが標準化する時期であった。欧州では印刷本の出現と「俗語」の標準化が重なったのである。

南アジアでは、サンスクリット語は、狭い職人的専門集団にその文字の流通が限られていたので、この時期印刷本が出回ることにはなかった。16世紀後半、宣教師が布教のため

にタミル語などのインド系文字による印刷を行ったが、本格的出版にはつながらなかった。

3 近代： 国家の庇護を受ける国語の場合には、公的な機関により規範化が進められる場合が多い。18世紀以降のスペイン、スウェーデン、19世紀以降のハンガリー、ルーマニア、20世紀以降のヘブライ語などがこれに相当する。プロテスタント圏では、ドイツ語、スウェーデン語、英語の場合のように、聖書の翻訳が重要な役割を果たすことがある。

国家の庇護を受けない少数言語の場合には、ウェールズのように宗教（プロテスタント、メソジスト派）が大きな役割を果たしたり、19世紀東欧スラブ語圏の「マチツァ」のように、民族主義的な運動団体がその役割を担う場合がある。

やでは、国家の役割はさらに強大で、国家の推進力がなければ、書記言語の規範化は成し得なかったといえる。したがって、「擬似漢字」の場合のように、それを推進した王朝が滅びると、その文字も廃れることになったのである。

4 まとめ： 書記言語の標準規範は、すでに文字獲得の時点で起こっていたが、厳密に言えば、それは「転写文字」の段階ではなく、「韻律文字化」の時点で生成する。漢字はすでに紀元前に規範化が成っていたが、欧州ではギリシャ語が、南アジアではサンスクリット語がこの段階で規範化を達成していた。したがって、歴史的に考えると、書記規範形成に関して、基本的に表意性の高い漢字が、表音文字に比べ規範力があるとはいえない。表意文字は文字数が多く習得が表音文字に比べると困難だが、古代における文字使用者は、どこにおいてもごく狭い世襲集団であり、規範の形成と維持は文字の性質によって変わるわけではないのである。

ラテン語はその周辺の書記言語の規範化が

古代・中世にかけて行われているので、これまで考えられていたより、その権威を発揮する時期は9-16世紀と比較的短い。東アジアでも、漢字は絶対的権威を古代から継続的に享受していたわけではなく、5-10世紀の表音文字(ソグド文字、突厥文字)の流入、10-13世紀の「擬似漢字」、さらには12-13世紀のチベット文字、ウイグル文字、パспа文字、ベトナムのチュノムなど表音文字の生成をその周辺で招いている。こうした「擬似漢字」の作製法では、ほとんどの場合、意味部と音声部からなる「形声」と、音の転用である「仮借」であることにも注目すべきだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 件)

[学会発表](計 23 件)

中江加津彦(関西外国語大学)「アラビア語における規範主義」2015年11月28日(土)-29日(日)、東京大学東洋文化研究所シンポジウム、科研「書記伝統の中の標準規範に関する歴史的東西比較」研究成果報告シンポジウム、主催:科研プロジェクト「書記伝統の中の標準規範に関する歴史的東西比較」、共催:東文研班研究「アジアにおける多言語状況と言語政策史の比較研究」

白音門徳、珠麗(内モンゴル大学)「東西の文字規範伝統の比較 モンゴル文字を例にして(共同発表)」同上

吳英喆、彭韃茹翠(内モンゴル大学)「契丹語と契丹文字の規範」同上

原聖「ラテン語文化圏における書記言語規範」同上

原聖「書記伝統の長い言語と標準語理論、ケルト諸語を中心に」ライデン大学(オランダ)シンポジウム「グローバル化する社会言語学」、2015年6月18-20日

原聖「科研プロジェクトの概要、今回の

シンポのねらいについて」科研費プロジェクト「書記伝統のなかの標準規範に関する歴史的東西比較研究」内モンゴルシンポジウム内モンゴル大学モンゴル学院会議室、主催:科研費「書記伝統のなかの標準規範に関する歴史的東西比較研究」(原聖代表)内モンゴル大学モンゴル学院

フロリアン・クルマス「書法と標準語化」同上

トマシュ・カムセラ「中東欧と東南アジアは似ているか、言語の規範的同形性、民族と国家について」同上

藤井毅「南アジアの書記言語について」同上

名和克郎「識字者が標準規範なしに母語で書く時-ネパール、ビャンス及び周辺地域のランを事例に」同上

11 原聖「西欧諸言語の規範、ケルト諸語の事例から」同上

12 トマシュ・カムセラ「中欧における言語の創出、長期的展望」同上

13 寺尾智史「中南米における諸言語の規範化」同上

14 荒木典子「江戸時代における白話語彙の受容」同上

15 落合守和「百年前の北京語について」同上

16 田中克彦「モンゴル語規範について」同上

17 フフバートル「モンゴル語の規範について」同上

18 田中克彦「日本語の規範について」同上

19 ディック・スマックマン(オランダ・ライデン大学)「標準語標準方言に関する構造主義的、社会言語学的理論をめぐって」科研費プロジェクト「書記伝統における標準規範の歴史的東西比較研究」第1回シンポジウム「近代東アジアの言語規範」2013年12月7日(土)・8日(日)女子美術大学杉並キャンパス7号館2階7201

20 黄行 (中国・社会科学研究院)「チベット語の近代規範」同上

21 バヤルメンド (内モンゴル大学)「内モンゴルにおけるモンゴル語の近代言語規範」同上

22 プルブジャブ (モンゴル科学アカデミー)「モンゴルにおけるモンゴル語の近代言語規範」同上

23 三ツ井崇 (東京大学)「近代朝鮮語の言語規範」同上

〔図書〕(計 3 件)

原聖 他『書記伝統のなかの標準規範に関する歴史的東西比較研究』(日本語版) 女子美術大学、2016年、317頁
原聖他《書写伝統之標準規範の歴史性東西方比較研究》報告書(漢文版)、女子美術大学、2016、171頁
HARA Kiyoshi, HEINRICH, Patrick (eds.), Standard Norms in Written Languages – Historical and Comparative Studies between East and West, English version, Joshibi University of Art and Design, 2016: 297

6. 研究組織

(1)研究代表者

原 聖 (HARA Kiyoshi)
女子美術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 20180995

(2)研究分担者

藤井 毅 (FUJII Takeshi)
東京外国語大学・総合国際学研究院・教授
研究者番号: 20199285

大黒 俊二 (ÔGURO Shunji)
大阪市立大学・文学研究科・教授
研究者番号: 50152096

高田 博行 (TAKADA Hiroyuki)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号: 80127331

寺尾 智史 (TERAO Satoshi)
宮崎大学・教育文化学部・准教授
研究者番号: 30457030

三ツ井 崇 (MITSUI Takashi)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号: 60425080

名和 克郎 (NAWA Katsuo)

東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号: 30323637

包 聯群 (BAO Lianqun)
大分大学・経済学部・准教授
研究者番号: 40455861

石部 尚登 (ISHIBE Naoto)
日本大学・理工学部・助教
研究者番号: 70579127

(3)連携研究者

荒木 典子 (ARAKI Noriko)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号: 40596988

岩月 純一 (IWATSUKI Jun'ichi)

東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号: 80313162

(4)研究協力者

バヤルメンド (BAIYINMENDE)

フロリアン・クルマス (Florian COULMAS)

チアド・デフラーフ (Tjeerd de GRAAF)

黄行 (HUANG Xing)

フフバートル (HUHBATOR)

トマシュ・カムセラ (Tomasz KAMUSELLA)

中江 加津彦 (NAKAE Kazuhiko)

落合 守和 (OCHIAI Morikazu)

ニコラス・オストラー (Nicholas OSTLER)

プルブジャブ (PUREVJAV)

ディック・スマックマン (Dick SMAKMAN)

田中 克彦 (TANAKA Katsuhiko)

許 峰 (XU Feng)

徐 大明 (XU Daming)

珠 麗 (ZHU Li)

彭 韃茹翠 (PENG Darhang)